

瓦版おはま

瓦版 おはま
第11号
H. 29, 12, 16 (土)
編集 発行
木村慎一

青森開港の恩人(五)

近世港湾商工都市を造成 青森市の基 慰霊祭は青森市を挙げて 開催を



油川浄満寺には初代弥七郎の俗名を記した位牌が安置されているが、代々の弘前藩士森山家の菩提寺は弘前新町の浄土宗西福寺でここに墓もあった。天正元年(一五七三)生まれ。幼名弥七郎、二歳の時、父阿保中務は大光寺合戦

で戦死。以後母方の齊藤家で育てられる。十七歳で藩主為信の近侍。内蔵之助(くらのすけ)の名を賜り二百石。以後森山を姓とす。慶長十五年(一六一〇)弘前城築城に使う鉄材が不足し、弥七郎は南部下北から鉄吹き職人を招き、上磯小国(おぐに)で製鉄させ築城に必要な鉄材を生産した。寛永元年(一六二四)二代藩主信枚(のぶひら)から青森開港奉行を拜命。町並を港湾商工業都市として設計し今日の県都青森市の基を作った。一方、中世から続いた油川湊を封鎖し、青森一手港とする強行策も講じた。寛永八年(一六三〇)藩内の派閥争い船橋半左衛門事件が起こった時、よく藩論を纏め事件を平定させた。その功が三代信義に認められ四百石に加増、外ヶ浜全派立惣司となった。寛永十五年(一六三八)藩営津軽坂牧場を開牧。慶安二年(一六四九)青森町民越前屋嘉兵衛の内真部(うちまなべ)藩林討伐が発覚。監督不行き届きを咎められ失脚。以後十一年の浪人を経て寛文元年(一六六一)四代信政に見出され青森倉庫(そうりん)奉行を経て中師派立奉行となる。寛文六年(一六六六)中師で病没。享年九二。土木関計の業績が多い中で青森開港は最も評価が高い。——この項終り——

町名標

(十一) 野木和(のぎわ)の巻き
野木和の町名標は平成十年(一九九八)、元氣町油川街づくり委員会が建立し、今も野木和入り口に立っている。標文は次の通り。
江戸前期貞享(じょうきょう)四年(一六八七)の検地帳には、羽白村と寺内村共通 小字地として「野木和」が見える。早くから景勝地として知られ、大正十四年(一九二二)油川町民が湖のほとりに五百本の桜を植えた。以来町も整備に力をいれ、昭和七年(一九三二)には「野木和公園」と命名し喧伝した。
大戦後の昭和二三年(一九四八)、外地からの引揚者三十世帯がここに入植し、またその他の移住者も集まって野木和町会となった
公園の半分近くを占める野木和湖の広さは十三、三ヘクタール、周回約四キロ。かつては五つの池や沼に分かれていたが灌漑用水に利用するため、羽白村民らが湖の北端に少しづつ土を盛り重ね、土手を造り水位を次第に上げて今のようになつた湖にした。
公園内「子どもの国」は、昭和十年(一九三五)から同四十年頃まで青森県自動車学校があった場所。園内ピクニック広場の軍馬之像は昭和十二年(一九三七)の建立。かつて戦争時代は農家の馬も軍馬として連れていかれた。また、龍神宮は昭和六十年頃の再建。元は茶屋町油川河畔にあった。